

「母児同室が妊娠分娩に及ぼす効果」

分担研究：Institutional baseでの実態調査
鹿児島市立病院周産期医療センター

研究協力者 鮫島 浩

要約

妊産婦の精神面に及ぼす母児同室制の影響に関して精神神経学的評価法を用いて検討した。対象は平成6年6月からの約2ヵ月間に鹿児島市立病院周産期医療センターで分娩した213例である。検討可能な194例の内訳は、母児同室群91例、母児分離群64例(新生児黄疸等の合併症で母児分離を要する症例)、母児異室群37例(high-risk妊娠で出生直後からの新生児管理を要する症例)であった。その結果、Stein \geq 8の頻度、Stein \geq 8かつEdinburgh \geq 9の頻度は3群間に有意差を認めなかった。3群間でSteinの最高得点の平均値を比較すると、母児同室群 6.3 ± 4.5 点、母児分離群 6.7 ± 4.3 点、母児異室群 8.1 ± 4.1 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。Stein \geq 8の日数を比較すると、順に、0.68日、0.68日、1.1日であり、母児異室群でStein \geq 8を示す日数が有意に多いことが判明した。一方、Edinburghの平均得点は母児同室群 5.6 ± 5.1 点、母児分離群 5.9 ± 4.5 点、母児異室群 8.6 ± 6.4 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。このように母児同室制は他の2群に比較し、精神神経学的に良いと判定された。次に母児同室群の91症例をStein \geq 8の12症例、Stein \geq 8かつEdinburgh \geq 9の17症例、いずれも正常の62症例の3群に分け、その臨床背景を比較した。初産、経産の割合、high-risk妊娠の頻度、帝王切開率など3群間に有意差を認めなかった。したがって、母児同室制におけるこれらの精神神経学的異常には多因子の関与が示唆された。

見出し語

母児同室、精神面支援、Steinの自己質問表、Edinburghの日本語版

研究方法

対象は1994年6月から8月までに、鹿児島市立病院周産期医療センターで分娩管理を行った全症例(213例)である。

われわれの施設では原則として分娩後24時間以内に母児同室としているが、high-risk妊娠で出生直後からの新生児管理を要する症例では分娩後直ちに母児異室としている。また、一旦母児同室となったものの、新生児黄疸等の合併症で母児分離を要する症例もある。そこで分娩から退院まで母児が一緒に生活した症例を母児同室群、high-risk妊娠で出生直後からの新生児管理を要した症例を母児異室群、分娩後3～5日目での新生児入院症例を母児分離群とし、この3群間で母体の精神状態を前方視的に評価した。

評価方法は、マタニティブルーズのスクリーニングとして用いられているSteinの自己質問表を、分娩後5日間、毎日記入し、5日間のうち1日でも8点以上を示した症例を陽性と判定した。また産褥5日目にはEdinburghの日本語版を用いて産後鬱病のスクリーニングを行い、9点以上を陽性と判定した。評価判定はまずSteinの結果から陽性と陰性に分け、Stein陽性はさらにEdinburghを用いて陽性と陰性とに分類した。その結果、Stein陰性(S-)、Stein陽性(S+)、Stein陽性かつEdinburgh陽性(S+E+)の三層に分類された。

対象のほとんどは助産婦と医師が行う母親学級を受講していたが、母児同室の制度や体制、母児同室の実態、あるいは母児同室時の看護側からの援助体制に関する十分な説明は受けていなかった。一方、母児異室が想定される妊婦には分娩前に担当助産婦と主治医から病状の説明があり、分娩後にも担当助産婦からの個別的な援助(主に声かけと新生児の病状説明)が行われた。母児分離症例にも新生児入院時と入院後に同様の個別的支援が行われた。

母児同室は分娩後24時間以内に開始し、退院まで終日、母親のベッドサイドで行った。母児同室群の新生児の観察は主に母親であり、それ以外にも1日1回の沐浴時に助産婦が体重測定等の観察を行った。

臨床的な背景因子として、初産経産、分娩方法、在胎週数、high-risk妊娠、母体搬送の有無、長期入院、床上安静の時間、分娩時間、授乳状態等を調べた。

統計は χ^2 自乗検定とt検定とで行い、5%未満を有意差ありと判定した。またデータは平均±標準偏差で表示した。

結果

1. 母児同室、異室、分離群の内訳

213例中、Stein、Edinburghのいずれかの試験が施行されなかった症例が19例あり、これらを除外症例とした。その結果、有効症例は194例であった。分娩から退院まで母児が一緒に生活した母児同室群が91例、分娩後3～5日目での新生児入院(母児分離群)が64症例、high-risk妊娠で出生直後からの新生児管理を要した母児異室群が39例であった。母児分離群は、新生児黄疸が60例、残りの4例は体重減少、感染症疑いであった。

3群間の主な臨床背景を表1に示す。母児異室群は対象の項でも言及したようにhigh-risk妊娠が多く、したがって早産の割合も高く、他の2群とは異質の臨床背景を有していた。一方、母児同室群と母児分離群とはほとんど同様の臨床背景を示した。

表1 有効対象194症例の臨床的背景

	母児同室群	母児分離群	母児異室群	χ^2 検定
症例数	91	64	37	
初産 %	48.4	42.2	51.3	ns
high risk %	42.9	43.8	94.9 *	p<0.01
preterm %	2.2	4.7	84.6 *	p<0.01
C/S %	20.8	15.6	43.6	ns

2. 精神神経学的評価法を用いた3群間での比較

全症例(n=194)における精神神経学的評価の結果は、(S-)が61.3%、(S+)が17.0%、(S+E+)が21.6%であった。

表2にそれぞれの群における割合を示す。3群間における(S-)、(S+)、(S+E+)の頻度には統計学的有意差を認めなかった。しかし、(S-)の頻度は母児同室群が最も高い傾向を示し、一方、(S+)や(S+E+)の頻度は母児分離群と母児異室群で高い傾向を示した。

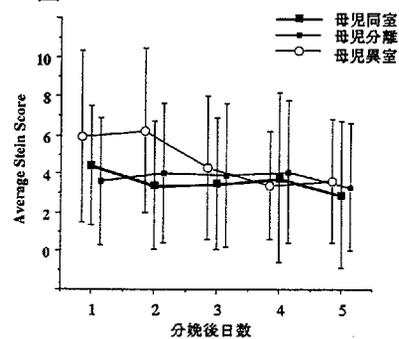
表2 有効対象194症例の精神神経学的検討

	total	母児同室群	母児分離群	母児異室群
症例数	194	91	64	39
Stein ≤ 7	61.3%	68.1%	56.3%	53.8%
Stein ≥ 8	17.0%	13.2%	21.9%	17.9%
Stein ≥ 8, EPDS ≥ 9	21.6%	18.7%	21.9%	28.2%

not significant

図1はそれぞれの群におけるSteinの平均得点を産褥日数毎に表示したものである。母児異室群では産褥1日目、2日目に高得点を示した。母児同室群と分離群とを比較すると、産褥2日以降では母児分離群が高得点を示した。全体として、産褥3日目以降は3群ともほぼ同様の動きを示した。

図1



産褥期間中(5日間)のSteinの最高得点を比較すると、母児同室群 6.3 ± 4.5 点、母児分離群 6.7 ± 4.3 点、母児異室群 8.1 ± 4.1 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。(unpaired T-test, p<0.01) またStein陽性を認めた日数を比較すると、順に、 0.68 ± 1.3 日、 0.68 ± 1.1 日、 1.1 ± 1.5 日であり、母児異室群においてStein陽性を示す日数が有意に多いことが判明した。(unpaired T-test, p<0.01) 一方、Edinburghの平均得点は母児同室群 5.6 ± 5.1 点、母児分離群 5.9 ± 4.5 点、母児異室群 8.6 ± 6.4 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。(unpaired T-test, p<0.01)

3. 母児同室群における精神神経学的評価と臨床背景
表3に母児同室群91例の臨床背景を、(S-)、(S+)、(S+E+)の3群に分けて表示した。3群間の臨床的背景に有意差を認めなかった。

表3 母児同室群91症例の臨床的背景

	Stein ≤ 7	Stein ≥ 8	Stein ≥ 8 , EPDS ≥ 9	χ^2 検定
症例数	62	12	17	
初産 %	45.2	75.0	41.2	ns
high risk %	41.9	25.0	58.8	ns
preterm %	3.2	0.0	0.0	ns
C/S %	17.7	16.7	35.3	ns

また、臨床背景の因子別に(初産経産、分娩方法、在胎週数、high-risk妊娠、母体搬送の有無、長期入院、床上安静の時間、分娩時間、授乳状態等)、Stein、Edinburghの陽性頻度を比較したが、いずれも有意差に至る単一因子は見い出されなかった。

考察

母児同室の問題は、母性の確立、母児関係の確立、母乳保育率の上昇等の観点から研究され、母児同室制の効用が証明されてきた。しかしながら、母体精神面に及ぼす母児同室制の影響に関する研究は少ない。前年度、われわれの行ったアンケート調査から、母児同室制に対して妊産褥婦がさまざまな印象をもちあわせていることが判明した。例えば、母児一緒にいるのを幸福に思う反面、母児同室制に対して精神的肉体的にきついなと思うという結果が得られた。しかしながら、このような精神状態を精神神経学的評価法を用いて具体的に表示するに至らなかった。そこで今回、マタニティブルーズのスクリーニングとしてSteinの自己質問表を用い、また、産後鬱病のスクリーニングとしてEdinburghの日本語版を用い、母児同室制の効用を具体的に評価した。

鹿児島市立病院周産期医療センターでは原則として母児同室制を採用している。母児同室制と母児異室制とを比較するにはcontrol studyが必要であるが、看護体制の問題上、2群に分けることが不可能であった。そこで今回のような3群に分けて検討を行った。

今回、母児異室群はStein ≥ 8 の頻度もEdinburgh ≥ 9 の頻度も高い傾向を示した。それぞれの平均値では他の2群より有意に高値を示した。しかし表1に示すごとく、他の2群(母児同室群と母児分離群)とは明らかに異なった臨床背景を有しており、この結果から、いわゆる母児同室制と母児異室制との優劣を結論づけることはできない。今回の結果からは、母児異室群に含まれるhigh-risk妊娠の中で、分娩直後から新生児管理のために母児分離が予想される妊婦に対しては、妊娠中

からの十分な精神面支援を要する、という結論は導かれると考える。

母児同室群と母児分離群とを比較すると、臨床背景に差がないにもかかわらず、Stein最高点の平均とEdinburgh平均点とに有意差を認めた。このように、一旦母児同室となった後に新生児入院となる場合、精神面支援の対象であり、十分な精神面介入を要すると思われる。

今回の母児同室群(n=91)におけるStein ≥ 8 の頻度は31.9%であった。また、Stein ≥ 8 かつEdinburgh ≥ 9 の頻度は18.7%であった。対象の約98%は妊娠37週以降の分娩であり(2例が妊娠36週)、分娩後24時間以内に母児同室となり、新生児合併症はなく、産褥5日目に無事母児退院となった。また、妊娠期間中に母児同室制に関する教育や指導はまったくなされていない。したがって、妊娠中母親に精神面介入を行わず、母児ともに合併症もなく分娩し退院した群におけるStein ≥ 8 とEdinburgh ≥ 9 の頻度を示している。今後の精神面介入の研究の対照資料として有用であろうと推測される。

また、母児同室群91例をさらに細分化し、Stein ≥ 8 、Edinburgh ≥ 9 の頻度を検討した。表3のごとくStein ≤ 7 、Stein ≥ 8 、Stein ≥ 8 かつEdinburgh ≥ 9 の3群にわけて臨床背景を比較したが、有意差に至る単一因子は見つからなかった。逆に、初産経産、帝王切開の有無、high-risk妊娠の有無、早産等とStein ≥ 8 、Edinburgh ≥ 9 の頻度とを比較したが、やはり単一の有意な因子は抽出されなかった。このようにStein ≥ 8 やEdinburgh ≥ 9 に関しては多因子の関与が唆された。

文献

1. Klaus MK, Jerauld R, Kreger NC et al. Maternal attachment. Importance of the first post-partum days. N Eng J Med (1972) 286:460-463.
2. 栄養問題委員会報告。母児相互作用の確立に関する実態調査。日産婦誌 (1986) 1949-1951.
3. 高橋悦二郎 母児同室制-実態と妊婦の意識調査。周産期医学 (1983) 13:2168-2175.
4. 兼子和彦 A.母児同室 異室の問題点。産婦人科の実際 (1987) 36:1359-1364.
5. 山下洋 マタニティブルーズの本邦における実態とその対策 厚生省心身障害研究 妊産婦をとりまく諸要因と母子の健康に関する研究 平成5年度研究報告書。
6. 岡野禎治ら Maternity bluesと産後うつ病の比較文化的研究 精神医学: 33;1051-1058, 1991.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

妊産婦の精神面に及ぼす母児同室制の影響に関して精神神経学的評価法を用いて検討した。対象は平成6年6月からの約2ヵ月間に鹿児島市立病院周産期医療センターで分娩した213例である。検討可能な194例の内訳は、母児同室群91例、母児分離群64例(新生児黄疸等の合併症で母児分離を要する症例)、母児異室群37例(high-risk妊娠で出生直後からの新生児管理を要する症例)であった。その結果、Stein 8の頻度、Stein 8かつEdinburgh 9の頻度は3群間に有意差を認めなかった。3群間でStein 8の最高得点の平均値を比較すると、母児同室群 6.3 ± 4.5 点、母児分離群 6.7 ± 4.3 点、母児異室群 8.1 ± 4.1 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。Stein 8の日数を比較すると、順に、0.68日、0.68日、1.1日であり、母児異室群でStein 8を示す日数が有意に多いことが判明した。一方、Edinburghの平均得点は母児同室群 5.6 ± 5.1 点、母児分離群 5.9 ± 4.5 点、母児異室群 8.6 ± 6.4 点であり、3群間にいずれも有意差を認めた。このように母児同室制は他の2群に比較し、精神神経学的に良いと判定された。次に母児同室群の91症例をStein 8の12症例、Stein 8かつEdinburgh 9の17症例、いずれも正常の62症例の3群に分け、その臨床背景を比較した。初産、経産の割合、high-risk妊娠の頻度、帝王切開率など3群間に有意差を認めなかった。したがって、母児同室制におけるこれらの精神神経学的異常には多因子の関与が示唆された。